

年間第17主日

福音朗読 ルカ 11・1-13

2022.7.24

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日のルカの福音書の朗読箇所は、イエス様が弟子たちに主の祈りを教えてくれる、そんな場面でしたね。ルカの福音書に出てくる主の祈りは、わたしたちがいつもお祈りしている主の祈りよりもちょっと短い。わたしたちがいつもお祈りしているのはマタイによる福音書に出てくるお祈りなんです。ルカのはちょっと短いんだけど、内容は同じで、だから最初のキリスト信者たちがイエス様から教えられた祈りとして主の祈りを大切にしていたということがよく分かります。

主の祈りというのは、全ての人のために祈る信者の使命、ということになっています。わたしたちもミサの中で主の祈りを唱えるときに、みんなのために、みんなというのはここにいるみんなじゃなくて、時代も超えて本当に全ての人のために、人類を代表して神様に祈る。信仰を与えられた者の一つの使命として主の祈りを祈ります。

だけど、みんなって言ってもなんか漠然としてますね。他の人のために本当に心を向けて祈ることができるように、聖霊の助けが必要です。わたしたちは、自分の殻の中に閉じこもる人間性を持っている、でも神様の呼びかけに答えたいっていう願いも心の底に持っている、その願いを消すことがないように、いつも神様と繋がっていることができるように助けてください、聖霊に助けられてわたしたちは本当の意味で主の祈りを祈ることができるんですよ、というのが今日の主の祈り、イエス様が教えてくれた、そして聖霊の助けをいつも願いなさいという聖書の流れで見取ることができるんじゃないかと思います。

今日のミサの冒頭でも申し上げましたけれども、今日はカトリック教会の中では「祖父母と高齢者のための世界祈願日」ということになっています。それは、フランシスコ教皇様が定められて、今年で2回目の世界祈願日になっています。教皇様はこの日のためにメッセージを出されています。そのメッセージ

の中で、高齢者やお爺さんお婆さんを孤独の中に置いておかないように、という他の世代の者への呼びかけがあると同時に、でもメッセージのほとんどの部分はお爺さんお婆さんや高齢の人たちに向けられた、自分たちの使命はもう終わったと思わないでください、というような呼びかけなんです。その中で、大きな使命として教皇様はこんなふうにおっしゃってます。

「わたしたち祖父母や高齢者（教皇様も自分もその一員だからはっきり言えるのかもしれないんだけど）には大きな責任があります。自分の孫に注ぐ、理解ある優しいまなざしと同じまなざしで他者を見ることを、現代の人々に教える責務です」。

大体お爺さんお婆さんは孫に甘いんですね。優しいの。そうじゃないよっていう例外もありますけどね。だけど、孫を甘やかすなというんじゃないで、むしろ、ご自分の孫は可愛いよね、でもそれと同じまなざしを他の人にも向けられたらもっと素晴らしいですね、という呼びかけですね。それが今日の福音の中で、「あなたがたは悪いものでありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。（孫にはもっと与えることを知っている。）まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」（ルカ 11・13）。それを聖霊の助けによって、他の人にもそのまなざしを向けることができるならば、それが信仰の恵みだ。

そしてまた、いやわたしには孫はいないからと言う方がいるかもしれませんが。教皇様だっていないんですよ。わたしだっていないんですよ。子供もいないから。だけど聖霊の助けによって想像力は持つことができます。そういう中で、もちろんそれは実際に子育てしたり孫の世話をした人の具体性とは違うなにか想像の世界かもしれないけど、でも聖霊の助けによって、お互い同士のことを自分の殻から出て祈り合う、そういうことができる。わたしたちは、自分の力ではない、神様からの呼びかけによって、ということになりますよね。

わたしたちは今日、主の祈りはイエス様から教えられたんだ、ということを経験を通して改めて確認いたしました。その祈りを身近な人、そして直接出会うことがないけどもいろんな報道やなんかで知っている苦難にある国や地域や人々のために、人類を代表して祈るように呼ばれたんだということを改めて思い起こしながら、今日特に、世代間のいろんな協力、分裂じゃなくて協力のためにも、祖父母と高齢者のための世界祈願日にあたって共に聖霊の助けのうちに主の祈りを唱えるということから、わたしたちがいろんなそれぞれの場所に

派遣されていたら素晴らしいと思います。わたしたちと共にいてくださる聖霊に信頼して、このごミサをお互いのためにお捧げしたいと思います。